

筑紫ファミリーフォント - B / 2014 / 和文専用

筑紫書体、
ファミリーへの展開



Fontworks



紙面という雑木林

—— 筑紫書体から新書体リリースのお知らせ

文字を読む…。それは「見る」ことの延長にある動作だけを意味するのではなく、眼と手を通じて何かに全身で触れることを意味することだと考えられます。テキストが明確に読み取ればよい…：だけではなく、紙と文字が紙面を通じて放つ不思議な空気が「読む」という空間を満たしていきます。文字の、さらに漢字とかなの周辺にただよう、涼やかな興奮に包まれた時間そのものが「読む」というひとときなのでしょう。

書体設計は、この人とことばとの間に発生する見えない〈第三の情報〉とも言うべき不思議な道標を手がかりに進行することが多いのです。

文字同士の間が発生する空間、句読点が導く空きと一瞬の視線の滞留、さらにはページを繰る手の動作が呼び起こす全身運動、紙の質感、そして著作がつくる意味世界など…：さまざまな現象が〈第三の情報〉を構成しながら、読むという動作に吸い込まれていきます。

とくに明朝体は、このような「物と心」の経緯に深く関わりながら設計されてきたように思われます。読むという個人的経験に関わる書体に、某かの「標準」を見い出そうとする作業が困難を極めることは言うまでもありません。

次世代の書体設計に寄せられるユーザーの皆様のご意見は、幅広くそして決して欠かすことの出来ない深い意味と高度な機能への期待として私どもに届きました。私たちは、未来の書体に期待される多様さと機能性を研究すべき努力を礎にして、「文字」を提供しながらデジタル・パブリッシングの世界における「第三の情報」を探求し続けたいと考えてきました。

ここにお知らせする筑紫書体の新しいリリースは筑紫アンティークLゴシック・B、筑紫アンティークSゴシック・Bです。

雑誌や広告、そして書籍などの、優しく強靱な紙面のデザインに向けて、新書体とともに筑紫ファミリーをよろしくお願い致します。

筑紫アンティークLゴシック	18pt	<u>B</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫アンティークSゴシック	18pt	<u>B</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫オールドゴシック	18pt	<u>B</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫ゴシック	18pt	<u>L</u> <u>R</u> <u>M</u> <u>D</u> <u>B</u> <u>E</u> <u>H</u> <u>U</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫A丸ゴシック	18pt	<u>L</u> <u>R</u> <u>M</u> <u>D</u> <u>B</u> <u>E</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫B丸ゴシック	18pt	<u>L</u> <u>R</u> <u>M</u> <u>D</u> <u>B</u> <u>E</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン 文字がつくる美しい紙面のデザイン

「筑紫明朝」のウエイトLB・RBは、ウエイトL・Rの横画だけでなく縦画をも太らせた書体で、黒地（地紋）の上に白抜きで印刷された時に相当するウエイトと同じ太さに見える「ブラックタイプ」を表しています。これは、多色オフセット印刷で白抜き明朝体を使用する場合、ウエイトを太くするだけでは横画のかすれに対応できなかった問題に対する一つのソリューションです。

筑紫明朝	18pt	<u>L</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>R</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>M</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>D</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>B</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>E</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>H</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫明朝（白抜き用）	18pt	<u>LB</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>RB</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫B明朝	18pt	<u>L</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫アンティークL明朝	18pt	<u>L</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫アンティークS明朝	18pt	<u>L</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫Aオールド明朝	18pt	<u>L</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>R</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>M</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>D</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>B</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
		<u>E</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫Bオールド明朝	18pt	<u>R</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫Cオールド明朝	18pt	<u>R</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫A見出ミン	18pt	<u>E</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン
筑紫B見出ミン	18pt	<u>E</u>	文字がつくる美しい紙面のデザイン

筑紫A見出しミックスB
12pt / フォントショップナル

詩語としての日本語

われわれにとって現代文が一番意味のある訣は、われわれが生存の手段として生命を懸けており、又それを生しも

滅しもする程の関聯かんれんを持っている言葉は、現代語以外にはない。だからわれわれが生命を以てうちかかってゆく詩語は、現代語である訣なのである。これは単なる論理ではない。われわれの

筑紫明朝 LB / 8pt / 和文等幅

事実であり、われわれの生命である。

この生命を持たない言語を、詩語として綴った場合には、それが古語でなくて、現代語であったとしても、其は全く意味のない努力になる。唯古語は近世又は中世以前の言葉であり、当然詩語としても生い先短い語である——人は詩語を第一国語にひき直してみて、或はすでに滅びた言葉として見る必要がある。それは誤りであるとともに、

筑紫明朝 L / 9pt / 和文等幅

筑紫明朝 L / 7pt / 和文等幅

詩語としての日本語

われ人共に、すぐれた訳詩だと賞讃しょうさんしたものであるが、翻訳技術の巧みな事は勿論ながら、其所には原詩の色も香も、

さてわれらこの日より星を注ぎて
乳汁色の海原の詩に浴しつゝ緑なす瑠璃を咬ひ行けば
こゝ水線は恍惚として蒼ぐもり
折から水死人のたゞ一人想ひに沈み降り行く
見よその蒼色忽然として色を染め
金紅色の日の下に
われを忘れし揺蕩は酒精よりもなほ強く
汝が立琴も歌ひえぬ
愛執の苦き赤痣を醸すなり

筑紫アンティークL明朝 L / 20pt / 和文等幅

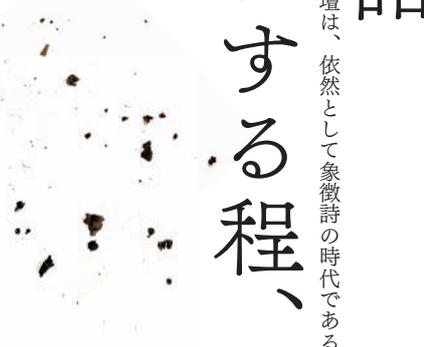
詩語としての日本語

われわれの考えた正しい詩形の時代は、意表外の姿をもって現れた。それが日本に於ける象徴詩の出現と
言うことになったのである。その後四十年以上を経ていけるけれど、やはり日本の詩壇は、依然として象徴詩の時代である。

われわれの生命をゆする程、

筑紫アンティークS明朝 L / 36pt / 和文等幅

生命のわれわれと強くつながっている現代語が、詩語としての生命を失った場合には、目もあてられないものとなる。それは言うまでもなく、第一国語に還元するからである。或は初めから詩語として用いられずに、対話の中のごろた石・丸太棒として転がっているに過ぎないからである。私などは、今の作者の中、最古語を使う者の内に這入はいる者である。併し私にとっては、古語は完全な第二国語である。私らの場合はむしろ外国語に持つ感覚に似たものを、古語に感じて其連接せられた文章の上に、生命を托たくしているのである。われわれにとって現代文



筑紫アンティークS明朝 L / 7pt / 和文等幅

筑紫明朝 L / 6pt / 和文等幅

が一番意味のある訣は、われわれが生存の手段として生命を懸けており、又それを生しも滅しもする程の関聯かんれんを持っている言葉は、現代語以外にはない。だからわれわれが生命を以てうちかかってゆく詩語は、現代語である訣なのである。これは単なる論理

筑紫明朝 L / 9pt / 和文等幅

われわれの考えた正しい詩形の時代は、

意表外の姿をもって現れた。

ただ一種の心うごき——
楽しいとも不安なとも、
何とも名状の出来ぬ動揺
の起ったものであった。
もっと我々が静かに思い
見る事が出来たのだったら、
日本語が全く経験のない
発想の突発に、驚きの
そよぎを立てていたかも
知れないのである。それ
でも、蒲原氏、ひきつづ
いて薄田泣菫さん以下の
人々の象徴詩に、相当に
われわれにも理會の出来
るものが現れた。

筑紫アンティークL明朝 L / 27pt / フォントショップナル

筑紫B明朝-L/24ボ/プロポーショナル

筑紫明朝-LB/8ボ/和文等幅

われわれの考えた正しい詩形の時代は、意表外の姿をもって現れた。

久しく用いられている語を少しあげてみると、「しじま」これに、沈黙・静寂など漢字を宛てて天地の無言・絶対の寂寥せきりょうなど言った思想的な内容までも持たせているが、われわれは詩の読者として何度この言葉にゆき合うたか。併し辞書などには、それに似た解釈をしているとしても、其は作家が辞書から得た知識だからである。古い用法では、むしろ宗教的な一種の儀礼である。無言の行とも言うべき事であり、時と



たとえば「青水無月と言ふ語は、われわれは辞書にすら見出す事は出来ないが、薄田氏だから拠る所があるに違ひない。美しい言葉だ」と言う風に。当時の詩人・文人の間に行われた勉強の一つで、辞書を読み、その美しい語を覚える、そう言う行き方の、泣菫さんにあり過ぎることを諷刺したものである。矮人をちひさごと言う古語で表現した事について、ひきうどとの関係を論じているあたりも、与謝野氏自身は、原書からの知識でなくては、と言うような不服を暗示したものであろう。まことに日本の初期象徴詩家の描いた彩画の壁は、ほの青く光る古語を一杯に散りばめていたのである。近代或は、現在の日本語が単に詩の表現に適せないばかりでなく、象徴的な聯想をよぶ陰翳は無いと感じたのであろう。今日からは古語の「散列層」の様に美しい、併し個々の古語自身は生きて働かない、と言う泣菫——曼陀羅まんだらが織り成されたのであった。多くの詩人や、詩の観察者は、これより前にこそ、沢山の古語詩があったものと想像して来ている様である。ところが事實は、そうあるべく考えた想像に過ぎなかった。明治十年代後期から二十年代に通じて現れた詩が、今日見て、いきなり詩としての価値の乏しさを感じさせるのは何によるのか。直観的にわれわれはまず嫌悪を感じる。それはまだ詩の文体を発見しない時代であり、既に

外国語に持つ感覚に似たものを、古語に感じて

現在の詩壇の有様を見ると、ある部分まで、作家たちの詩は、日本語を忌避している様に見える。考えのある人は、自分の用いる言葉が、日本語的な印象を与え過ぎる事を嫌っている様にも見える。日本語が平俗だと考えている以上に、外国語の持っている様な陰翳いんえいを自在に浮べる事の出来ないのを悪んでいるのであろう。

生命のわれわれと強くつながっている現代語が、詩語としての生命を失った場合には、目もあてられないものとなる。それは言うまでもなく、第一国語に還元するからである。或は初めから詩語として用いられずに、対話の中のごろた石・丸太棒として転がっているに過ぎないからである。私などは、今の作者の中、最古語を使う者の内に這入る者である。併し私にとっては、古語は完全な第二国語である。私たちの場合はむしろ外国語に持つ感覚に似たものを、古語に感じて其連接せられた文章の上に、生命を托

静かに底に沈んで 柔かな光を放つであらう



筑紫B見出ミン-E/20ボ/和文等幅

筑紫アンティークL明朝-L/9ボ/和文等幅・文字ツメ20%

筑紫アンティークL明朝-L/7ボ/和文等幅

筑紫アンティークS明朝-L/6ボ/和文等幅

存外早く定型律破壊を唱導する所謂破調いかんじょうの詩の時代が来た。この長い年月に整理すべきものは整理しながら、やはり昔の象徴詩家が古語によせた情熱と同じものを、今の詩壇の人々の詩語や、文体の上に散見する事が出来る。

は、同じであった。まず語あって、其所に内容が生ずると言った行き方を、自らとって居たのである。その語は外国語を以てするのでない限り、——又それは出来る事ではないのだから——民族的な思想内容の深い様に感ぜられる、整頓し理想化した古語及び古語の排列からなる文体が、このときになって現れて来たのである。だがそれは、初めから一時的なものとしての条件が

明治十年・二十年代に安定の出来なかった新体詩の様式に対する感覚は、三十年に入ると同時に、ほぼ到達点を見る事が出来た。それは空想に耽かたっただけの西洋詩の様式や、我が国でこた古りた今様や、長歌の様式ではなかった。まず思想があつて表現を駆使すると言う考え方が結果において

筑紫明朝-L/7ボ/和文等幅

筑紫明朝-LB/8ボ/和文等幅

彼らの眼は外形の特性をのみ見て、内部の特性を見得ない。彼らは活きた人生と自然からいつも同じ「自然」を見いだす。

筑紫Aオールド明朝-D/16ボ/和文等幅

しかし彼らが社会の裏に、無恥な女を描き、性慾の衝動に動く浮薄な男を描き、あるいは山国海辺、あるいは大都会小都会の風物情緒を描く時には、それがあらゆる階級の男女や東西南北の諸地方を材料とするにかかわらず、またそれぞれの境遇や土地をおのその特性によって描いているにかかわらず、結局その作品の核をなすものは千篇一律に同じ観察だという感じを与えるのである。彼らの眼は外形の特性をのみ見て、内部の特性を見得ない。彼らは活きた人生と自然からいつも同じ「自然」を見いだす。かくのごときことは生の豊富な活動を見得るものには全然あるわけではない。——しかも彼らはこの「自然」に満足して、それを解し得たことを誇っている。その「自然」がいかにかつてはほとん

筑紫A丸ゴシック-M/10ボ/和文等幅

ここに恐らく自然主義の

薄弱な反動に過ぎない理由があるのである。

筑紫Cオールド明朝-R/21ボ/和文等幅

「自然」を深めよ

筑紫A丸ゴシック-M/9ボ/和文等幅

ものを感じ、知覚するとともに、この外形を象徴として現わ

筑紫Aオールド明朝-L/7ボ/和文等幅

自然主義は殻の固くなった理想を打ち砕くことに成功した。しかし代わりに与えられたものは、きわめて常識的な平俗な、家常茶飯の「真実」に過ぎなかった(たとえば、人間の神を求めるとか人道的な良心とかいうものはあとからつけた白粉に過ぎない。人間を赤裸々にすればそこには食欲、性欲、貪欲、名誉欲などがあるきりだ、と言うこと)。こういうことはいかなる意味でも新発見ではない。昔から数知れぬ人々が腹のなかで心得ていた。それを心得ていないのは千人に一

人か百人に一人の理想家や敬虔家だけであつた。現在でももちろん同様である。ただ多くの人は露骨にそれを発表するのを好まない(それだけ理想家、敬虔家の情熱が根深い習俗として社会を支配しているのである)。——そこを自然主義は露骨でもって刺激した。そうしてこの主義がいかにも重大な意義を持つているらしい感じを世人に与えた。実際それは、偽善家の面皮を正直という小刀で剥いでやつた、という意味で、重大な意義を持つに違いない。あるいはまた幻影に囚わ

ここに恐らく

自然主義の薄弱な反動に過ぎない理由があるのである。

筑紫Cオールド明朝-R/8ボ/和文等幅

我々の生活や作物が「不自然」であつてはならないことは、今さらここに繰り返すまでもない。我々は絶対に「自然」に即かなくてはならぬ。しかしそれで「自然」についての問題がすべて解決されたとは言えない。むしろ、問題はそれから先にある。

筑紫Bオールド明朝-R/18ボ/和文等幅

そこで生活の「真実」、人間の「自然」の問題である。我々はこの「真実」、「自然」を描くと自称する多くの作家を持っている。しかし彼らもまた常識的な粗雑な眼をもって見た「自然」以上に何ももの知らないではないか。彼らはただ「多くの場合」「多くの出来事」「多くの人間」を知っている。あるいは外景、室内容貌、表情などに関する詳細な注意や記憶を持っている。これらも確かに一種の才能である。誰でもが彼りのような観察と記憶とを持つことはできない。けれども多くを詳らかに見ることが直ちに「自然」を深く見ることに限らない。彼りの眼が鋭さを増さない限り、彼りの経験がいかに積み重ねられようとも、質は依然として変わらないのである。ここに私は「書き方」の上でますます精練と簡潔と円熟とを加えて来た四五の作家を眼中に置いて考えてみよう。彼らは皆人生を底まで見きわめたようにふるまつてゐる。

筑紫Bオールド明朝-R/8ボ/和文等幅

十九世紀後半が生んだ偉大なものは、たとえ自然主義のいい影響を



これも自然である。声、表情、そうしてある目的のために老人の人格を圧迫している青年の意志、感情、打算。我々は外形に現われた

自然をただ醜悪に観察して喜んでいた作家たちが、近ごろ何となく認識論的な、あるいは倫理的な思想を、その作品中に混ざるに至ったことは、新しい時代が彼らに及ぼした影響としてかなり我々の興味をひく。しかし彼らは、彼ら自身の思索が彼らの最も忌みきらう概念的なものであることに気づかない。従って彼らの観察と思想とは、まるで木に竹をついだように、彼らの作品中に混在している。このようなことは彼らの内生の幼稚をほかにして解釈のしようがない。彼らは「自己」を改革する代わりに、二三の新しいことを自己にくっつけようとする。生まれ変わる代わりに、竹

筑紫B丸ゴシック.U/7ボ/和文等幅



筑紫A丸ゴシック.D/32ボ/和文等幅

十九世紀後半が生んだ

偉大なものは、

たとえ自然主義のいい影響を

うけていたにしても、

決して自然主義的な本質を持ってはいなかった。

べらで自分の顔の造作を造り変えようとする。あまりにたわいが無い。彼らはまず、自分たちのとは違った自然の見方をほんとうに心底から理解してみなくては行けない。私は彼らが性慾を重んじるからいけないというのではない。ただそういうものに対してもっと深い見方のあることを理解しろというのである。我々の生活は穢ないものをもきれいなものをも包容している。迷いもすればまた火のように強烈に燃え上がることもある。耽溺の欲望とともに努力の欲望もある。この内面の豊富な光景を深く理解した人の見方が、彼らの見方よりもいかに多くの高い価値を持っているか、それを血によって感じてもらいたいのである。彼らは多くの心境を理解し得ないがゆえに、排斥する（我々

筑紫A丸ゴシック.R/6ボ/和文等幅

十九世紀後半が生んだ偉大なものは、たとえ自然主義のいい影響をうけていたにしても、決して自然主義的な本質を持ってはいなかった。そこには常に自然主義以上のものがあつた。この事實は世界の精神潮流から

筑紫B丸ゴシック.E/28ボ/和文等幅

「自然」を深めよ

筑紫A丸ゴシック.R/8ボ/和文等幅

そうして 眼を開いて見るものには、 人間の自然である。

ところでこの外形と全然異なつた内部生命を認識することは、いかにして可能であるか。たとえば我々はある人の顔の筋肉が動くのを見て、その人の喜怒哀楽やまたそれ以上に複雑なさまざまな心持ち・思想などを感知する。我々の眼に映じたその微かな筋肉の動きと我々の感じたその内生とは、実際全く似よりのないものである。この二つは何ゆえに直接に結びつかぬのか。

これは恐らく我々の「生」に相通するものがあるからである。我々はそれ以上に原因を知らない。ただ事実として直接にこの「生」の融合交通のあることを経験する。——しかし我々は、この際我々の感ずるものが厳密に我々自身の感じであることを忘れてはならない。もとより我々は、それを自分の感情として経験するのではなく、あくまでも相手の感情として、自己

識を離れて感ずるのである。その焦点にはただ相手の感情のみがあつて、自分はない。むしろ自己が、その焦点において、相手の内に没入しているのである。けれどもいかに自分を離れた気持ちになつていても、「自分」が「相手」になることはできない。相手の感情を感じながら、実はやはり自分自身の感情を感じているに過ぎない。いわば自己を客観化して感じているので

あつて、相手はただ、その自己客観化を触発するにとどまるのである。——すなわち我々はある外形を見た時に、その外形の意味として我々自身の感情を感じている。そうしてそれをその対象の認識と呼んでいる。そこで問題は、その対象の生命にピタリと相応するような生命を自己の内に経験し得るかどうかに帰着して来る。



筑紫A丸ゴシック.U/8ボ/和文等幅

筑紫B丸ゴシック.M/12ボ/和文等幅



ところで内部に突き入ろうとする衝動を感じない人たちは（たとえば前に言った作家連のごとき）、きわめて常識的な、普通一般の見方をもって人間の内部を片付けてしまう。そうしてただ外部のさまざまな変化や状態にのみ注意を集中する。彼らの「自然に即け」という意味は、右の常識的な見方の埒外に出るなどということに過ぎないのである。

で、彼らの強みは、一般の常識が認容するところをふりかざすにある。たとえば「こういう人が実際あるのだ」、「こういう事を現に自分も感じている、多くの人も感じている」、「それが理想から見て好ましくないことであろうとも、とにかく人間の自然なのだ、私はその自然を捕えた、」云々。

機械的建築技術の創造は一つの有機体である。それはあたかも吾人の驚愕を喚起する『自然』の生産物のごとく、純粹性に従い、たとえば生産的法則に思いをひそめる。調和は、実に仕事場あるいは工場から生まれる生産物にある。それはいわゆる高等なる芸術、シクステイヌにも、エレクティオンにもない。そ

筑紫ゴシック-L/9ボ/和文等幅

筑紫ゴシック-B/8ボ/和文等幅

みずからを新しく形造るこの時代の生みの苦悩とは、みずからの深奥の中にひそむ調和に対する衝動の確認にほかならない。

おお、われらの眼よ、見よ、この調和こそ、能率の法則によって整理され、物理学をもって規定されるところの労働の苦しみの表示の中にその影をひそめている。この調和は、その理性的根拠をもっている。それは断じて気分の気紛れではなく、論理とそれをもってしては測りがたき世界との関連的構造の支配の下にあるのである。人間の労働能力のけなげなる過重とその忍耐は、現代における『自然』である。そしてそれは、厳密なる意味においては実に解きがたき課題なのである。機械的建築技術の創造は一つの有機体である。それはあたかも吾人の驚愕を喚起する『自然』の生産物のごとく、純粹性に従い、たとえば生産的法則に思いをひそめる。調和は、実に仕事場あるいは工場から生まれる生産物にある。それはいわゆる高等なる芸術、シクステイヌにも、エレクティオンにもない。それは良心、知識および精密

言葉の上に、光の上に、音の上に、人は問いを、問いの上にまた問いを重ねる。

筑紫ゴシック-M/11ボ/和文等幅

筑紫ゴシック-R/20ボ/和文等幅

筑紫ゴシック-A/5ボ/和文等幅



自分が自分より隔てられたる隙虚に正しく画布を挿し入ることは、地上の最も困難なる使命の一つであるとともに、多くの苦難をそれは用意する。ミケランジェロが法皇の食卓に嘗めし苦さ、ドラクロアが官廷批評家より浴せし不当なる譏諷、常に時に追い迫り、それを追い抜き、ついに時そのものを生みいでし画布は激しき不安と闘争の下にそのすがたを露わにした。

真に存在するものは不安の上にある。この不安なき世界はハイデッガーにとりては饒舌(Gerede)の存在にしかすぎない。それはすでに語られたることについてのおしやべりである。そこに何の本質凝視もなく、話されたことへの話である。それは何ものかについての直接なる話ではない。みんなが語るところのもの、ありきたりのもの、「だそうだ」のことについての言葉である。人々と共にともかく同

白い画布、それは一つの不安である。

筑紫ゴシック-L/7ボ/和文等幅

同じことをいいたい考えたいころもちである。言葉の……また絵の……その日暮しである。ここにはじめて好奇のころが意味をもつ。それは何ものかを見究めんとするのではなくして、ただ見ればよいのである。人だかりの中に何でもよい首をつっこみのぞき込む思想の……芸術の……散歩である。思想のショーウィンドのぞきである。そこには存在への執着も

筑紫ゴシック-L/7ボ/和文等幅

筑紫ゴシック-R/9ボ/和文等幅

われわれは、われわれの画布をいかなる角度において存在の中に挿し入れるかを寂かに憶いみるべきである。涯もないマンネリズム、意味のない党派心、猜怨と嫉視、繰り返えさるる朋党の瞞しあい、執拗なる剽窃等々の中に画布が浸さるるかぎりにおいて、すでに白き画布は、再び腐剥することなき腐剥の中に朽ちているはずである。画布は、すでに死膚の白さに彩られているはずである。なぜならそこには、生のただ一つの徴しである生そのものへの疑問記号を失っているからである。自分の存在へのまともな肉迫が見失われているからである。かくて絵画の不安をして、われわれは一朋党と異な

われわれの存在の疑問記号

《フラーゲツアイヘン》である、

「白き画布」は、

今新しき香りを放ちつつ、

われわれの前に架けられている。

筑紫オーールドゴシック-B/12ボ/和文等幅

あるべき不安は、存在に肉迫せざるの嘆きの上にあらねばならない。

この命題の中に私たちは、反省なき多くの思いあがりを見いだすで

あろう。にもかかわらず、われわれのかくれたる魂の底に、何ものかを感じしめる衝撃を潜ませていることを否むわけにもいきまい。そこに、聖なる一回性をその底にもつ時代の大きい後姿がにじんでいる。

ギリシャにおいて芸術の特殊性が考察された時、始めにプラトンより次いでアリストテレスによって指摘された概念は、技術 [teche] であり、また模倣 mimesis であった。ロマン派的思想すなわち芸術至上主義は、これらの

筑紫ゴシックL/8ボ/和文等幅

筑紫ゴシックM/8ボ/和文等幅・文字ツム30%

軌道の上の生活

筑紫オールドゴシックB/14ボ/和文等幅

概念の否定より出発し、その芸術論は、技術の概念に対する天才の概念、模倣の概念に対する創造の概念の上に成立した。

しかし、この天才と創造の概念は、それが指摘された時は、実に正当な権利を保持したにもかかわらず、その解釈者あるいは亜流によってみずからその正当なる意味の理解を失うこと、あたかもちょうど技術と模倣の概念がその正当なる意味の理解が怠られたと同様であったことである。

その瞳は日常の生活、新聞、実験室、刑事室、天文台、あるいは散策の人々のポケットの中にこの機械の見る眼、そのもつ性格は、すべての人間の上により深いより大きい性格と

筑紫ゴシックL/26ボ/和文等幅

筑紫アンティークLゴシックB/8ボ/和文等幅

この不安なき世界はハイデッガーにとりては饒舌 (Gabble) の存在にしすぎない。それはすでに語られたることについてのおしなべりである。そこに何の本質凝視もなく、話されたことへの話である。それは何ものかについて直接なる話ではない。みんなが語るところのもの、ありきたりのもの、「だそうだ」のことについての言葉である。人々と共にともかく同じことをいいたい考えたところもちである。言葉の……また絵の……その日暮しである。ここにはじめて好奇のところが意味をもつ。それは何ものかを見究めんとするのでなくして、ただ見ればよいのである。人だかりの中に何でもよい首をつっこみ、のぞき込む思想の……芸術の……散歩である。思想のショーウィンドのぞきである。そ

絵画の不安

それはレンズの見かたの発見である。

筑紫ゴシックB/18ボ/和文等幅

ここには存在への執着もなく、強い把握もない。好奇は常にすべてに対して興味をもつとともに、しかも何ものにも執しない。そこで存在はその根を失って日常性の中に墮し、ただ人と共に在って、自分を見失われてしまう。読まれたるもの、語られたるもの……描かれたるもの……についての剽窃に日は過ぎていく。すべてについて、そして何もののためにでもなく問われかつ

筑紫ゴシックU/54ボ/和文等幅

筑紫ゴシックL/8ボ/和文等幅

筑紫ゴシックL/6ボ/和文等幅

あるべき不安は、存在に肉迫せざるの嘆きの上にあらねばならない。「存在の意味そのものへの問い」、みずからがみずからの内面にふりかえりての畏れ、自分の背後より襲いかかる悪寒の上にあらねばならない。なぜとも知れざる、みずから、みずからより隔てられたる「隔り」の意味、生ける生々しき空間 (Raumlich-Sein) の上にあらねばならない。

かかる意味で芸術史とは、永遠なる存在摸索の記録とも考えられるであろう。そしてかのギリシャでは、調和をもって存在の形相として受け入れた。ロマン派はこれに対して、天才の情熱の中にそれを求めた。それは異なる意味をもつてなめられたる、一つの「青き花」である。これについて現代、「意味づけられたる時代」としての存在は、いかなる意味でそれを受け入れつつあるのであるのか？ この「問い」はよき意味において、また悪しき意味において、一つの絵画の不安を構成している。私は、その両様の意味で受け取られるところの一つの警告をここに呈出し、また検討

100% 75% 50% 25% 5%

それは、もはや死ぬることなき死への埋没である。

筑紫アンティークSゴシックB/24ボ/和文等幅

筑紫ゴシックL/8ボ/和文等幅

答えられる。この世界をハイデッガーは「軌道の上の生活」(auf der Spur sein) と名づける。いわば在来の考えかた、ありきたりの日常性の中に樂々と生きることである。真の自分を掘り下げることをにぶらせることである。この世界を彼は「命なき存在」への没落と名づける。自分に飽滿せる安易、だらしなき悦樂と放恣、自分に畏るることなくかえって、独自の意見を失っ



「絵画の不安」中井正一／青空文庫より